

# 東京音楽大学リポジトリ

## Tokyo College of Music Repository

山田耕筰 《交響曲 へ長調》に見られる「時差」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-07-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 武石, みどり, Takeishi, Midori メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1306">https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1306</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 山田耕筰《交響曲 へ長調》に見られる「時差」

武石 みどり (音楽学)

山田耕筰 (1886~1965) の《交響曲へ長調》は、日本人が作曲・初演した最初の交響曲として知られている\*<sup>1</sup>。現存楽譜資料に基づく校訂楽譜はすでに『山田耕筰作品全集』第1巻 (山田 1997) として出版されている\*<sup>2</sup>が、本稿ではさらに「作曲した時と演奏する時との時差」という観点から、楽譜資料の問題点について新しい知見を加えて検討する。

## 1. 作曲年代に関する情報

本曲の作曲年代について、自筆スケッチおよび初演プログラムから得られる情報は表1のとおりである。ここから山田は第1楽章から順にピアノ譜の形で作成し、並行してオーケストレーションを進めたことがわかる (山田 1997: 5)。

表1. 作曲年代の情報

	ピアノ用スケッチ	オーケストレーション
第1楽章	1912年4月起稿5月30日完成	1912年6月25日起稿
第2楽章	1912年6月30日完成	1912年7月22日完成
第3楽章	1912年7月4日完成	1912年7月28日完成
第4楽章	1912年7月	1912年11月8日夜2時完成
情報の典拠	Ms. 510a-dのタイトルページ	日本初演プログラム

作曲の発端は、1912年に卒業制作として交響曲と管弦楽伴奏付きの合唱曲を書くようにレオポルト・カール・ヴォルフ (Leopold Carl Wolf, 1859-1932) 教授に命じられたことによる。山田は、その夏を過ごした北ドイツの保養地ディアハーゲンの牧歌的な情景に触発されて交響曲の一節ができ上がったと回想している (山田 2001: 119-122)。

他方、1914年12月6日の帝国劇場における初演 (東京フィルハーモニー会管弦楽部第14回演奏会) の際のプログラムには、「自分は (中略) 純音楽者のする様に心の内側を話した。そして、それに『かちどきと平和』と云う題名を附した」と書かれている (山田 1997: 5)。これが、このタイトルが見られる最古の資料であるため、『かちどきと平和』は初演に際して付加されたものと考えられる。

\*1 陸軍軍楽隊の大沼哲 (1889~1944) は、これより早く1909年暮れから交響曲《平和》を書き始めていたが、完成したのは1913年12月であった (宮内 1993: 158, 167)。

\*2 その後出版された山田 2016 は、作品全集に戦後の楽譜資料による情報を加えて校訂した (山田 2016: 152-153) ものであるが、正確な資料記述と資料評価を伴わないため実用版楽譜と言わざるを得ない。

## 2. 現存楽譜資料の状況

《交響曲へ長調》の楽譜伝承上の問題は、作曲時および初演時に存在していた自筆スコアが消失しており、作曲・初演時に近い楽譜資料としてはパート譜だけが現存していること、さらにそれらのパート譜セット（下記①～④）のいずれも完全ではないということである。主要な楽譜資料（いずれも日本近代音楽館所蔵）は以下のとおりである（遠山音楽財団附属図書館 1984：270-271；山田 1997：6-7）。

### ① Ms1476a-d（パート譜）

全楽章のパート譜であるが、第1～第3楽章は弦楽器パートのみしかない。主に山田自身と写譜者 A により、1914年12月6日の「東京フィルハーモニー会第14回演奏会」（於：帝国劇場）における初演（山田が指揮）のために準備されたと考えられる\*<sup>3</sup>。

### ② Ms. 1534a（パート譜）

第1楽章と第2楽章のみで、クラリネット I とファゴット II のパートが欠けている。

### ③ Ms. 1534b（パート譜）

第3楽章の管楽器と打楽器のみで、弦楽器パートはない。英語表記が多く、1919年1月24日の Second orchestra concert（於：カーネギーホール）におけるニューヨーク初演（山田が指揮）で使用されたと考えられる

### ④ Pr. 2092（パート譜）

全楽章の弦楽器パートの謄写版印刷譜。1919年1月のニューヨーク初演で③と併せて使用されたと考えられる。

### ⑤ Ms. 1477（パート譜）

全楽章の管楽器と打楽器パートの筆写譜で、作成者・作成時期ともに明らかではない。

### ⑥ Ms. 1098（スコア）

山田の写譜を引き受けていた大津三郎（生没年不明）が、戦後に作成したものであり、上記①～④のパート譜に比べてはるかに遅い時期に作成された。

『山田耕筰作品全集』においては、①と②がほぼ同時期に作られたと推測し、各楽章の主資料・副資料が以下の表2のように設定された（山田 1997：7）。

---

\*3 Ms. 1476a-d における主要な写譜者 A は、山田耕筰の師であるハインリヒ・ヴェルクマイスター Heinrich Werkmeister (1883-1936) ではなく、初演を担当した東京フィルハーモニー会管弦楽部のコントラバス奏者、原田潤 (1882~1946) であると推測される（山田 1997：xi；武石 1999：21-23）。

表 2. 『山田耕筰作品全集』における主資料・副資料

		主資料	準主資料	副資料	参考資料
第 1 楽章	管		② Ms. 1534a **		⑤ Ms. 1477
	打		② Ms. 1534a		⑤ Ms. 1477
	弦	① Ms. 1476a *	② Ms. 1534a	④ Pr. 2092	
第 2 楽章	管		② Ms. 1534a **		⑤ Ms. 1477
	打		② Ms. 1534a		⑤ Ms. 1477
	弦	① Ms. 1476b	② Ms. 1534a	④ Pr. 2092	
第 3 楽章	管			③ Ms. 1534b	⑤ Ms. 1477
	打			③ Ms. 1534b	⑤ Ms. 1477
	弦	① Ms. 1476c		④ Pr. 2092	
第 4 楽章	管	① Ms. 1476d			⑤ Ms. 1477
	打	① Ms. 1476d			⑤ Ms. 1477
	弦	① Ms. 1476d		④ Pr. 2092	

\* cl. I を含む      \*\* cl. I と fg. II は欠落

すなわち、第 1 楽章・第 2 楽章と、第 3 楽章、および第 4 楽章では、それぞれ主資料、準主資料、副資料が異なっており、さらに管打楽器と弦楽器の間でも準拠資料が異なるという状況が起こっているのである。

### 3. Ms. 1534a の年代推定と位置づけ

表 2 で第 1 楽章と第 2 楽章の準主資料とされているパート譜② Ms. 1534a について、『山田耕筰作品全集』の校訂報告においては、パート譜① Ms. 1476a-d (初演版) と同時期のものと推定している (山田 1997: 7)。本稿ではその成立時期について、改めて三つの方向から検討する。

#### 3-1. 写譜者

② Ms. 1534a を筆写した人物は、『山田耕筰作品全集』においては写譜者 D とされている (山田 1997: 7)。このコピストは《交響曲へ長調》を含め、表 3 に挙げる合計 4 曲の山田作品を筆写している。

表3. 写譜者Dによる筆写譜

作品名	作曲年	初演年月日	初演地	筆写譜（使用五線紙）	作曲者の関与
秋の宴	1912	1918年 10月16日	ニュー ヨーク	Ms. 1327b p（共益12段；芝 公園，1パートのみ松本町）	自筆タイトル、 署名、印
交響曲 へ長調	1912	1914年 12月6日	東京	Ms. 1534a p（共益12段；松 本町，1パートのみ芝公園）	自筆タイトル、 印
婚姻の響き	1913	1930年 10月7日	東京	Ms. 1327b p（共益12段；松 本町）	自筆タイトル、 署名
墮ちたる天女	1913	1929年 12月3日	東京	Ms. 1096 vs（Beethoven Pa- pier 32） Ms. 1099 s（共益30段；銀座）	自筆タイトル、 署名 自筆タイトル

p = part, s = score, vs = vocal score

表3から言えることは、この写譜者Dが山田のベルリン留学の最後の時期（1912～13年）の作品のみを筆写していること、また12段の五線紙については共益商社書店の五線紙を一貫して用いており、自筆タイトルや署名・印が共通していることから、同時期に作成した（したがって、各曲の初演のために準備したのではない）可能性が大きいことである。

さらに、② Ms. 1534aのパート譜に付けられたタイトルページの書き方が、① Ms. 1476a-dに付けられた自筆のタイトルページと酷似していることから、写譜者Dは② Ms. 1534aを山田本人の関与の下に、① Ms. 1476a-dと近い時期に作成したものと推測される。

### 3-2. 五線紙

表3の筆写譜欄に示したとおり、② Ms. 1534aのパート譜には共益商社書店の12段の五線紙が用いられている。共益商社書店の住所として五線紙の折り目近くに「三田松本町四十四番地」と記されたものが大半で、ティンパニ・パートのみ、住所が「芝公園十八号五番」となっている。同じ写譜者Dの《秋の宴》のパート譜では、同じ共益商社書店の12段の五線紙でも大半が「芝公園十八号五番」の住所となっており、1パートのみ「三田松本町四十四番地」と書かれた紙である。さらに《婚姻の響き》においてはすべて「三田松本町四十四番地」の共益商社12段の五線紙を使用している\*4。

共益商社書店は1914年4～5月頃に芝区芝公園18号5番から芝区三田松本町44番地に移転している（『音楽界』1914年5月号、70）ため、「三田松本町四十四番地」の五線紙を使用できたのはそれ以降であると考えられる\*5。写譜者Dはふたつの住所の五線紙を

\*4 表3の中で、《墮ちたる天女》のスコア Ms. 1099 に用いられたのは銀座の共益商社楽器店の30段の五線紙であり、共益商社書店の販売品ではないため、以下の考察からは除外する。

用いていることから、購入後すぐに五線紙を使用したと仮定した場合には、1914年4～5月の前後が作成時期として推定される。この時点では第一次世界大戦勃発前で山田はドイツに帰国するつもりであり、12月の東京での初演は予定されていなかった。

### 3-3. 筆写内容

第1楽章冒頭8小節は、のちに《君が代》の一部を織り込んだと評されるフレーズ<sup>\*6</sup>であり、『山田耕筰作品全集』（山田1997）では提示部と再現部の両方においてモデラートのテンポが指示されている。このフレーズのテンポ指定がどのように筆写されているかという点から、② Ms. 1534aの作成時期について検討する。

#### 3-3-1. 第1楽章冒頭

譜例1に示したとおり、スケッチ Ms. 510aの段階では、第1楽章はアレグロ・モルトで開始し、8小節目のフェルマータで一時停止した後、9小節から再びアレグロ・モルトで音楽が続くように書かれていた。② Ms. 1534aにおいても同様に、第一楽章の冒頭には全19パートにおいてアレグロ・モルトの表示がある。8小節目のフェルマータの後、19パート中15パートにおいてア・テンポ [もとのテンポで] と記されており、スケッチ Ms. 510aと実質的に同じ内容であると考えられる。これに対して、初演時に用いられた Ms. 1476aでは第1楽章冒頭はモデラートと指示され、8小節目のフェルマータの後、9小節目にアレグロ・モルトの指示がある。すなわち、初演時の演奏では冒頭8小節は中庸なテンポであり、それがフェルマータで停止したのち、初めてアレグロ・モルトの急速なテンポとなる。ニューヨーク初演の際に用いられた④ Pr. 2092においても、これと同様のテンポ表示となっている<sup>\*7</sup>。したがって Ms. 1534aの内容は Ms. 510aに近く、Ms.

\*5 参考までに、山田耕筰自身の自筆譜のうち作曲年代の判明しているもので共益商社書店の五線紙を使用しているものを五線紙別に記すと、以下のようになる。

- ・芝公園十八号五番の住所の五線紙：《愛する人へ》（1915年）Ms. 1; 《贖い》（1915年）Ms. 244, Ms. 306; 《コロネーション・プレリュード》（1915年）Ms. 490
- ・戦時特別品と記され、松本町四十四番地の住所が書かれた五線紙：《愛する人へ》（1915年）Ms. 5; 《ものがたり》（1916年）Ms. 1318; 《源氏楽帖》（1917年）Ms. 1316, Ms. 1323
- ・「戦時特別品」の記載がなく、松本町四十四番地の住所が書かれた五線紙：《アンプロンプチュ》（1916年）Ms. 416; 《タンタジールの死》（1919年）Ms. 1322b; 《指蔓外道》（1920年）Ms. 1086

戦時特別品とは第一次世界大戦時に作成されたことを指すものと考えられる。上記のように、山田の五線紙の使い方は年代とともに変化していることが確認できる。

\*6 この部分について片山杜秀は、「日本の国歌《君が代》の旋律の一部、即ち「ちよにやちよに、さざれいしの」のうちの「やちよに、さざ」ところの音型を織り込んでいる。本邦最初の交響曲の出だしに国歌を引用し、それによって日本という国の署名をしてみせた」と指摘している（片山2003:4）。同様に後藤暢子は、「山田が《交響曲へ長調》の作曲に没頭していた最中に、明治から大正に改元された。ドイツ帝国の首都ベルリンにいて、彼が日本帝国を象徴する国歌のメロディを、けっして異国趣味を感じさせぬ巧妙な手法で最初の交響曲のモットーに編みこんだとしても不思議ではない。」と述べている（後藤2014:96）。

1476a より早い段階に作成された可能性が大きい。

譜例 1. 第 1 楽章提示部冒頭

Ms. 510a *Allegro molto* (♩=100) *f* *ff* *p*

②Ms. 1534a *Allegro molto* [cl, fg, str] *f* *mf* *ff* *a tempo* [cl, fg, str] *p*

①Ms. 1476a *Moderato* [cl, fg, str] *f* *mf* *ff* *Allegro molto* [cl, fg, str] *p*

④Pr. 2092

のちに付加

Ms.1476a 一部パートでは後に付加  
Pr.2092 全パートあり

3-3-2. 第 1 楽章再現部

第 1 楽章冒頭の 8 小節は、再現部ではどのように扱われているだろうか。譜例 2 に示したように、スケッチ Ms. 510a においては 192 小節から冒頭の 8 小節がそのまま再現する譜面となっているが、のちに後半の 4 小節、すなわち 196~199 小節に削除の×マークが付けられている。この 4 小節は、その後の楽譜資料のいずれにおいても抜かして筆写されており、結果として楽章全体が 4 小節少なくなっている。また、① Ms. 1476a においても② Ms. 1534a においても再現部に入ってから 4 小節間、すなわち 192~195 小節までを区切る複縦線は記入されていない。さらに、① Ms. 1476a と② Ms. 1534a のいずれにおいても、再現部冒頭（192 小節目）には何のテンポ指示も記されていない。② Ms. 1534a では、19 パート中 10 パートにおいて 192 小節目にモデラートの指示が後から付加されているが、パート譜を筆写した当初にはこの指示はなく、再現部冒頭においてテンポの変化はなかった。再現部の冒頭 4 小節（192~195 小節）を明瞭に複縦線で区切り、モデラートの指示を記入し、196 小節目でアレグロ・モルトに戻る指示が明記された最も早い楽譜資料は④

\*7 ただし、Pr. 2092 の各パートの表紙には I. Allegro molto と記されており、元は第 1 楽章が冒頭からアレグロ・モルトであった痕跡が残っている。

Pr. 2092、すなわちニューヨーク初演に用いられたパート譜である。

譜例 2. 第1楽章再現部冒頭

Ms. 510a

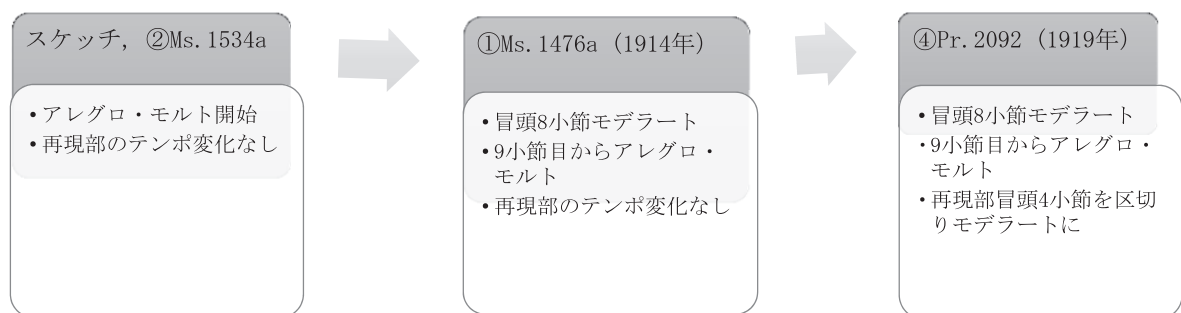
のちに付加しているものもあり  
(Moderato)

②Ms. 1534a

①Ms. 1476a

④Pr. 2092

以上をまとめると、② Ms. 1534a は日本初演用の① Ms. 1476a-d よりも早くに準備されたものである可能性が高い。また第1楽章の冒頭8小節および再現部冒頭4小節のモデラートによる強調は、作曲当初にはなく、日本初演とニューヨーク初演を経て加えられたものであると考えられる。この経過は下図のように表すことができる。『山田耕筰作品全集』(山田 1997) の譜面では、④ Pr. 2092 の内容が反映されていることになる。



まとめ

以上の考察により、《交響曲へ長調》の主資料・副資料は、② Ms. 1534a、① Ms. 1476a-d (1914年12月日本初演用)、③ Ms. 1534b と④ Pr. 2092 (いずれも1919年1月ニューヨーク初演用) の順で作られたと推測できる。すなわち、この作品は作曲者が直接



関わっているうちからすでに3段階の時差をもって改訂が積み重ねられた。『山田耕筰作品全集』(山田1997)は①～④を組み合わせた形で校訂されており、この時差を譜面のみから読み取ることは難しい。楽章によって、あるいは部分によって復元されたバージョンが異なっていることを演奏者は理解する必要がある。

たとえば「山田らしさ」が表れているとされる第一楽章冒頭の旋律(注6参照)は、作曲当初(1912年)には特に強調されず、アレグロ・モルトですばやく演奏されるものであった。初演(1914年)の際に『かちどきと平和』というタイトルとともに、初めて冒頭8小節がモデラートのテンポで強調され、さらにニューヨーク初演(1919年)で再現部の冒頭4小節もモデラートにして強調されるに至った。すなわち、この特徴的なフレーズは作曲の「時差」の中で前面に押し出されてきたものにほかならない。改訂による特徴づけの変化は、山田がディアハーゲンの自然と情景に感じ入って作曲した時期と、日本で最初の交響曲を発表し、さらにそれをニューヨークのカーネギーホールで演奏する気概と自負を示そうとした時期との違いの表れでもあろう。

このように、ひとつの作品の校訂楽譜の中に3段階の時差が含まれるという点で、山田耕筰の《交響曲へ長調》は大変興味深い事例といえることができる。

#### 参考文献

片山杜秀

- 2003 「山田耕筰：交響曲「かちどきと平和」他」『日本作曲家選輯 KÓSCAK YAMADA Symphony in F major “Triumph and Peace”』Naxos 8.555350J, 2-9.

後藤暢子

- 2014 『山田耕筰 作るのではなく生む』[ミネルヴァ日本評伝選](東京：ミネルヴァ書房)

武石みどり

- 1999 「原田潤の筆跡と生涯」『東京音楽大学研究紀要』23, 1-23.

遠山音楽財団附属図書館(編)

- 1984 『山田耕筰作品資料目録』(東京：遠山音楽財団附属図書館)

宮内孝子

- 1993 『作曲家大沼哲の生涯 日本のオーケストラ黎明・胎動期を偲ぶ』(東京：宮内孝子)

山田耕筰

- 1997 「交響曲《かちどきと平和》」『山田耕筰作品全集』第1巻(管弦楽曲1) 後藤暢子(主幹)・武石みどり(編集・校訂)(東京：春秋社)22-149(楽譜), 5-12(校訂報告).
- 2001 「若き日の狂詩曲」『山田耕筰著作集』第3巻 後藤暢子編(東京：岩波書店)7-207. [『若き日の狂詩曲』(東京：大日本雄弁会講談社, 1951)]
- 2016 『交響曲へ長調《かちどきと平和》(1912)』久松義恭・クラフトーン(編集・校訂)(東京：東京ハッスルコピー)